

〔論 文〕

ナショナリズムを飼い慣らすことは可能か？

下 地 真 樹

I はじめに

現代日本におけるナショナリズムをめぐる問題状況を確認するために、二つの問題を取り上げたい。

一つは、いわゆる徴用工問題である。2018年10月の韓国大法院判決が日本企業に対する賠償の支払いを命じた判決を出した。その内容は「日本による韓国の植民地支配は当初より不法なものであったということを前提とし、被害者の請求を認めて、日本企業に損害賠償を命じた」ものである¹⁾。朝鮮半島に対する植民地支配の不当性を踏まれば、当然の判決とも思える。

ところが、この判決をきっかけに、日韓関係が急速に悪化しており、現在も打開の糸口はまったく見えていない。なぜだろうか。日本の植民地支配という状況の中で、どのような人たちが徴用工にされたのか、その徴用はどのようなやり方で行われたのか、人々はどのような被害を受けたのか、加害の責任は誰にあるのか、そして今回の韓国大法院はどのような論理において判決を出したのか、丁寧に考えられるべき問いはいくらでもある。しかし、そうした問いを覆い隠すかのように、「韓国は約束を守らない、信用ならぬ国だ」という言い捨てのプロパガンダが次々に拡散されていく。この問題を冷静に捉え返そう、まずそもそもの問題を理解しようという姿勢さえほとんど見られない。なぜなのだろうか。

いま一つの問題を取り上げよう。新天皇の即位をめぐるさまざまな出来事である。大多数の

人々にとっては、単なるなごやかな祝賀イベントに過ぎないのかもしれない。しかし、たとえば「万世一系」「現存する世界最古の王朝」というあからさまな虚言がマスメディアにおいてさえ飛び交っているのを見ると、薄寒い気持ちを禁じ得ない。なぜ、誰も咎めないのだろうか。

天皇制にまつわる問題にはさまざまあり、論じることはおろか、論点を列挙することさえ手に余る。しかし、一つだけ指摘するならば、明白な虚偽があたかも事実であるかのように語られ、それを誰も咎め立てしない、してはならないというルールでもあるかのように、という状況は、あまりに不健全である。丁寧に事実に基づいて誠実に考えるという営みそれ自体が愚弄されているように感じる。その意味で、徴用工問題に対する独善的態度、頭から理解可能性を拒絶した態度と、通底する何かがあるように思われる。

以上のような問題意識から、本稿では、ナショナリズムについて、改めて批判的に検討したい。議論は、次のような手順で進められる。まず、ゲルナーによるナショナリズムの定義を検討し、ナショナリズムがある種の〈過剰〉を抱え込んでいることを指摘する(第2節)。次に、萱野稔人による「ナショナリズム批判」批判を検討する(第3節)。萱野は既存のナショナリズム批判を厳しく批判した上で「ナショナリズムを否定せず、つくりかえる」ことを提案している。しかし、萱野の議論は先に指摘した〈過剰〉をナショナリズムの切り離せない一部として自明視しており、その点は再検討が可能であることを述べる。さらに、ナショナリズムの〈過剰〉

に歴史修正主義が含まれており、これを切り離さない限り、ナショナリズムが排外主義につながることを防げないことを主張する(第4節)。最後に、全体の議論を整理し、今後の課題について述べる。

II ナショナリズムとはなにか

1. ゲルナーによるナショナリズムの定義

よく知られているように、ナショナリズムを定義することは困難である。しかし、なんらかの作業仮説を定めなければ、議論を進めることは一層困難である。そこで、本稿では、とりあえずの出発点として、アーネスト・ゲルナーによる定義を採用する。ゲルナーは、ナショナリズムを次のように定義している。

ナショナリズムとは、第一義的には、政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならぬと主張する一つの政治的原理である²⁾。

「政治的な単位」とは、「国家」あるいは「(国家を構成する集団としての)国民」であり、その国家において法的に国民としての地位を付与されている人々の集団である。一方、「民族的な単位」は「民族」、より具体的に述べるならば、血縁ないし先祖・言語・宗教・生活習慣・文化等に関して「われわれは〇〇を共有する仲間だ」という意識が広まっている集団³⁾と述べることができるだろう。

政治的な単位と民族的な単位が一致していない状況は広く存在している。ある国家の内部に複数の民族が存在し、多数派と少数派の間で対立が生じていることもあれば、ある民族が複数の国に分散して生活しており、独自の国家を持たず、過酷な迫害を受けていたりすることもある。どのような場合であれ、こうした政治的な単位と民族的な単位のズレは軋轢をもたらし、独立運動などの権利獲得運動や紛争に発展することもある。

このようなイメージからすれば、「まず民族が存在し、次にナショナリズムが生まれてくる」と言いたくなる。「民族が存在し、迫害を受け、自分たちの国家を樹立すべく戦う」という物語は、いかにもステレオタイプな〈民族の物語〉である。しかし、ゲルナーによれば、話はそう単純ではない。むしろ、「まずナショナリズムが存在し、そこから民族が構成される」とゲルナーは言う。次に、この点を検討してみよう。

2. ナショナリズムが民族に先行する

民族という概念について、ゲルナーは「民族を生み出すのはナショナリズムであって、他の仕方を通じてではない」という逆説を指摘している⁴⁾。つまり、ナショナリズムは民族に先行する。これは重要な指摘である。なぜなら、このように考えるならば、しばしばナショナリストが口にするような物語、民族が先に存在していることを前提する〈民族の物語〉はすべて成り立たなくなるからだ。

では、ナショナリズムはどのようにして生じるのか。ゲルナーによれば、ナショナリズムを生み出す最大の要因は、農耕社会から産業社会への移行である。事態は次のように展開する。

まず、農耕社会においては、読み書き能力を含む高文化に触れることのできる人々はごく少数であり、こうした技能を必要とする職業は、これら少数の人々によって担われる。その他の大多数は食料生産活動、すなわち、主として農業に従事しており、先の高文化を身につけた人たちは明らかに異なっている。異なる役割を果たしている二つの階層の違いは明白であり、少数派とその他の断絶こそが、社会の安定にとっては重要である。すべての人々をつなぐ文化的共通性や共通意識は存在しないし、存在する必要もない。

これに対して、産業社会では、読み書き能力や効率性・合理性を重視する思考や行動の様式を身につけた人々が労働者として大量に必要となる。絶えざる技術革新と経済成長は、職業内容の短いサイクルでの更新を伴う。急速に社会

Mar. 2020

ナショナリズムを飼い慣らすことは可能か？

的分業が発展し、協働する人々の間では、それだけ精密なコミュニケーションを頻繁に行う必要が生じる。こうした変化のすべてが、高文化の徹底的な普及を要請する。これが人々をつなぐ文化的共通性となり、共通意識が育まれる基盤となる。

ところで、このような高文化の普及は、自然には生じない。その普及を担うのは国家の教育政策である。高文化の普及という事業はあまりに大きすぎるため、国家以外の主体では効果的に実施することができないからだ。かくして、産業社会の要請に応じて標準化された教育内容が、国家が全人口に対して施す教育制度を通じて伝達され、産業社会が必要とする高文化が遍く人々の間に普及することになる。

むしろ、一般的な社会的条件が、エリートの少数派にだけでなく全人口に普及する標準化され同質的で中央集権的に支えられた高文化を促進する時、教育を通じて容認された輪郭のはっきりした統一的文化が、人々が進んで、時には熱烈に一体化したがるほとんど唯一の単位を構成するという状況が生まれるのである⁵⁾。

このようにして、同質的で流動性の高い人々が社会の中に産み落とされる。彼らに施される教育の内容は多岐にわたる。共通の言語をはじめとする、産業社会を支えるために必要なさまざまな技能はもとより、宗教や文化、生活習慣なども含まれる。かつて高文化によって区切られた異なる階層は消滅し、均質で同質的な一群の人々からなる単一の階層に収斂する。

つまり、産業社会への移行が人々を同質な集団に作り替えることを要請し、国家がその役割を担い、全人口に対して教育を施す。言うなれば、民族的単位に合わせて政治的単位が作られていくのではなく、政治的単位が産業社会の要請に応じて人々の均質化を押し進め、結果として、民族的単位の基盤が作られていく。ナショナリズムが先にあり、その作用の中で、民

族が作られていくわけである。

3. ナショナリズムの抱える〈過剰〉

さて、以上のゲルナーの議論は、大筋で理解可能な説明と思われる。しかし、疑問も残る。たとえば、大澤真幸はゲルナーの議論を要約・整理した上で、次のような疑問を呈している。

以上に概観したようなゲルナーの議論は、しかし、いくつかの疑問を誘発する。第一に、ゲルナーの議論は、宗教に類比させることができるような、ネーションへの深い感情的なコミットメントを説明しない。産業化への機能的要請という根拠によってのみでは、己の死をも恐れぬほどにネーションに深く執着する者が無数にいるという事実を説明できないだろう⁶⁾。

私もこの疑問に同意する。その上で、何が宗教的熱狂に対比しうるナショナリズム的熱狂をもたらすのかを考えてみよう。まず思いつくものとしては、〈民族の物語〉あるいは〈国民の物語〉とでも呼びうるものが一役買っていることは想像に難くない。たとえば、民族意識に目覚め、理不尽な境遇に怒り、団結して正当な政治的権利を求めて戦う先人たちの〈物語〉。あるいは、共通の敵に直面し、団結して勇敢に戦い、強敵を退けて危機を乗り越えた同胞たちの〈物語〉。人々は、〈物語〉を通じて自分が属する民族集団に自分自身を重ね合わせ、なんらかの役割を果たしたい貢献したいという熱情に駆り立てられていく。一つには、このような構図があるだろう。

そして、このような〈物語〉だけではない。伝統的な音楽や舞踊、宗教、民族衣装、その他民族的特徴を際立たせるさまざまな要素と合わせて、国家が運営する教育制度を通じて伝達され、人々の民族意識を強化する。「近代的で最新式の快進撃を続ける高文化は、それが不朽不滅で、強固で、再確立しうるものとしてつきり信じ込んでいる民俗文化から拝借した（そして、そ

の過程で様式化した)歌や踊りを通して、自らを崇拜するのである」⁷⁾。

しかし、ここで一つの疑問が湧く。なぜ、「民俗文化から拝借」する必要があるのだろうか。「近代的で最新式の快進撃を続ける高文化」だけではダメなのだろうか。少なくとも、ゲルナーが指摘した産業社会の要請という要因からは、技術や技能に関わる高文化を教えればよいだけであり、民族性を際立たせる諸要素は余分である。私が〈過剰〉とみなしているのは、これである。この〈過剰〉が教えられる理由は、産業社会の要請とは別に考えられねばならない。

さらに言えば、ナショナリズムの虚構性の問題については一層の不思議さが募る。つまり、単に「民俗文化から拝借する」段階に留まらず、明白なウソさえもが民族性を際立たせるために動員されていることを意味するからである。特殊性を際立たせるために、ナショナリズムの普遍性に寄与する要素である知識の客観性や合理性さえもが投げ捨てられているわけだ。

こうした教育内容は、どのような理由によって、ナショナリズムの一部となるのだろうか。十分な答えを提示することは難しいが、現時点の見解として述べるならば、ナショナリズムは(国民統合の論理である以上に)国民動員の方便だからと私は考える。つまり、単に国民を集団として統合するのみならず、その時々の方針に合わせて、ある方向に向けて人々の行動を一致させる(=動員する)、そのようなことが可能な人々を作り出すという目的があるのではないか。少なくとも、このように考えることで、ナショナリズムが荒唐無稽で不合理な〈物語〉を伴うことについて、ある種の合理性として理解できるようになる⁸⁾。

それでは、何に対して動員しようというのか。第一に、労働者としてである。これは、産業社会の直接の要請でもあり、ここまでの議論とも重なる。しかし、それだけではない。単に、自分自身の生活のために労働者となっているだけなら別だが、いわゆる「滅私奉公」と呼ぶうる過酷な環境でも「我慢して」責任を果たそうとす

る方向に人々を誘導したいならば、ナショナリズムの〈過剰〉はその役割を果たすだろうと思われる。

そして、第二に、兵士としての動員があるだろう。これについては、ゲルナーの議論の中では特に明示的に扱われてはいない。しかし、歴史的に見れば、ナショナリズムによって、人々の兵士としての動員可能性が高められたことに異論はないと思われる。さらに言えば、産業社会化が資本主義化を伴い、その進展が国内経済の行き詰まりに伴う帝国主義・植民地主義に繋がっていった歴史的文脈を考えるならば、労働者／兵士としての動員は、車の両輪のような関係だったと言うこともできるだろう⁹⁾。

Ⅲ 萱野稔人による「ナショナリズム批判」批判

1. 萱野の主張の論理構造

本節では、萱野稔人によるナショナリズム擁護の議論¹⁰⁾を検討する。まず、その概要を整理しよう。萱野は通俗的なナショナリストとは異なり、ナショナリズムが排外主義を生み出す等の副作用を持つことを正面から認めている。その上で、ナショナリズムを捨て去ることができない理由を列挙し、「ナショナリズムを否定するのではなく、つくりかえること」¹¹⁾を主張する。その論理構造は、概ね次のようになっている。

- (1) ナショナリズムは排外主義をもたらす危険性がある。
- (2) ナショナリズムは国民国家の前提である。
- (3) ナショナリズムは国民主権原理の前提である。
- (4) 国民国家が国民主権原理に基づく政策を行うことで、排外主義を抑制する。

ナショナリズムには副作用の危険性があるが、同時に、副作用を抑制する可能性もまたナ

Mar. 2020

ナショナリズムを飼い慣らすことは可能か？

ショナリズムに基盤を置いている。ゆえに、ナショナリズムは必要であるし、ナショナリズムを否定することは、むしろ、排外主義等の害悪を助長することに繋がる。概ね、このような論理である。これらの主要命題のうち、(1)については特に異論はない。このようなナショナリズムの危険性については多くの論者が指摘しており、改めて検討するまでもないと思われる。その他の三つの命題について、以下、検討していこう。

2. ナショナリスティック／非ナショナリスティックな国民国家

まず、命題(2)について見ていこう。萱野はパトリオティズムを批判する文脈で次のように述べている。以下、やや長めに引用する。

しかし、こうした(ナショナリズムにパトリオティズムを対置するような(筆者注))立論によってナショナリズムを超えることはできない。というのも、それは単に国家の問題を回避するための方便に過ぎないからだ。

ナショナリズムは国家の問題と切り離せない。これが主要なナショナリズム論の検討から導かれた基本的な認識である。そしてその国家は、物理的暴力行使を背景にして人びとを法的決定にしたがわせるという運動によってなりたっている。

ナショナリズムに地域主義としてのパトリオティズムを対置することは、そうした物理的暴力行使にもとづいた政治権力の問題にかかわらずともいいような議論の枠組みを設定することにほかならない。結局のところ、そうした枠組みのもとでパトリオティズムを肯定することは、物理的暴力行使にもとづいた権力の実践に汚されていないからパトリオティズムは(ナショナリズムより)いい、と主張することにしかないからである¹²⁾。

ここで萱野は新川明¹³⁾と姜尚中¹⁴⁾の議論を批判しているのであるが、その当否はここでは措く。ここで問題にしたいのは、萱野が国家とナショナリズムの関係を自明視していることである。

国民国家の意味をどのように捉えるかの問題なのだが、ひとまず、「国民のための国家」というニュートラルな意味で捉えることにしよう。その場合、これまで〈過剰〉と指摘してきた要素を含めて「国民」を考えるのか、それとも、これを切り離れた形で「国民」を考えるのかでは、その中身は異なるはずである。

たとえば、岡野八代は、ナショナリズムが「国民における局面の一つである民族としての一体感や帰属意識にのみ着目し、おそらく「わたしたち一人ひとり」としてナショナリズム以上に重要な権利義務の関係や、政治参加や市民としての実践の意味等について蓋をしようとする」¹⁵⁾ことを批判し、市民権＝シティズンシップの概念を彫琢している。こうした概念を援用することで、ナショナリズムの〈過剰〉を取り除いた形で「国民」を定義することは可能だし、そのような形で「国民国家」を構想しなおすことも可能だろう(それを「国民」「国民国家」と呼ぶのが適切かどうかは別問題ではあるが)。

問題は、ナショナリズムの〈過剰〉は取り除くことが可能かどうか、という点にある。切り離すことができず、ゆえに国民国家は常に〈過剰〉が伴う国民を基礎としてしか成立しないのであれば、萱野の主張のとおりである。しかし、このような〈過剰〉を取り除いた形で「国民」を定義することが可能であれば、萱野の批判は必ずしも妥当しない。

仮に、このような〈過剰〉を取り除いた高文化を共有する人間集団を考えてみよう。ここには共通言語や共通の思考様式、行動様式がある。産業社会を可能にするような高文化の諸要素が含まれる。素朴な愛郷心や家族への愛着、地域や職場における連帯感・仲間意識など(まさしくパトリオティックな心情)も含まれるかもしれない。普遍の人権原理をはじめとするリベ

ラルな価値は尊重され、良き市民であることだけが国民の条件であり、その他のいかなる人種的・民族的条件を求められることもない。荒唐無稽な虚偽を含む「神話」「歴史」は含まれないし、それらへの忠誠を試されることもない。

もし、このような人々を「国民」とみなすような国家が可能であるとすれば、このような国家もまた国民国家と呼べるはずだ。とりあえず、これを、ナショナリスティックな国民国家に対して、非ナショナリスティックな国民国家と呼ぶことにしよう。既に述べたように、非ナショナリスティックな国民国家を構想することは十分に可能であるように思われる。だとすれば、命題(2)は支持しえない。

3. 国民主権原理と普遍的人権原理

次に、(3)について検討しよう。ナショナリズムは国民主権原理をもたらす。つまり、「国家は国民のものであり、国民のために働かねばならない」という観念をもたらす。だから、ナショナリズムは必要だ、というわけである。

しかし、国民主権原理をもたらすのはナショナリズムだけだろうか。たとえば、普遍的人権原理は、主権国家システムが現に存在していて、現実的な方策を考える際の前提として考えられるべき状況にあるならば、主権国家に対して「人権を尊重し擁護せよ」と命じるはずである。ここでの人権には自由権や社会権、参政権などの数々の権利が含まれるはずであるから、主権国家システムの下での普遍的人権原理は、国民主権原理を帰結することになる。つまり、普遍的人権原理は国民主権原理を既に含んでいる。さらに言えば、将来、仮に主権国家システムに変わる統治システムが出現したとしても、その新たな統治システムに対して、普遍的人権原理は人権の尊重と擁護を命じるだろう。

それだけではない。国民主権原理はしばしば暴走する「国民」に対して歯止めたりえない。あるいは、「国民の名の下に」行われる蛮行に対しては、歯止めにならない。しかし、普遍的人権原理であれば、(実際に止め得るかは別にして

も、その論理としては)歯止めになりうる¹⁶⁾。

つまり、普遍的人権原理は、国民主権原理と同様に機能することができる上に、多くの点でより優れている。この点で言えば、ナショナリズムを維持しなければならない理由はなく、命題(3)は支持できない。

4. 格差社会批判

まず、萱野が格差問題をどのように理解しているかを整理しよう¹⁷⁾。

第一に、格差問題の原因である。萱野によれば、格差問題の原因は経済のグローバル化である。グローバル化の進展により、国内の労働市場は海外の労働市場の低賃金労働者との競争圧力に晒される。その結果、国内労働者の賃金は下降する。

ただし、この賃金下降は一様には生じない。賃金下降は知識・熟練労働者よりも非知識・非熟練労働者において顕著に生じるため、結果として、両極の労働者の賃金格差は拡大する。

第二に、格差問題の帰結である。上記の格差拡大のメカニズムにおいて劣位に置かれる非知識・非熟練労働者たちは、競争相手である海外の労働者たちに敵愾心を抱く可能性が高い。同時に、日本社会における自分自身の居場所を失う危険性を感じる、つまり、社会的排除への危機感が高まる。これら二つの要因により、ナショナリズムが排外主義に変質してしまう危険性がある。

第三に、格差問題の問題化可能性である。ここまで見てきた格差問題は、実は、グローバルな視点で見れば、「海外労働者と国内労働者の賃金格差の縮小」であり、本来ならばそもそも問題ではない。これを問題化できるのは、ナショナリズムによって同胞優先・国内優先の原理が導入されるからである。さもなければ、この事態を問題化すること自体ができなくなってしまふ。

つまり、「格差問題に対処しなければ、排外主義が生まれる危険性がある」「しかし、格差問題を問題化するためには、ナショナリズムを前提

Mar. 2020

ナショナリズムを飼い慣らすことは可能か？

としなければならない」ということである。逆に、もし、ナショナリズムを棄却するならば、格差問題の問題化そのものができず、格差問題への対処も行わないことになり、その結果、排外主義が発生することを促進してしまうことになるだろう。おおむね、このような論理である。

第二点については、事実問題として正しい見解かどうかは実証的に確かめる必要があるが、とりあえず現時点で異論を述べるつもりはない。この点は前提として議論を進めよう。

まず、容認できないのは第一の格差問題の原因についての認識である。ここで萱野は労働所得のみを問題にしているが、所得格差の一番の要因は金融所得の多寡である。この点を考慮せずに格差問題を論じるのは失当である。さらに、金融所得の多寡は資産の多寡に由来する以上、問題は階級的視点で把握される必要がある。しかし、こうした構造を無視して国外の低賃金労働者を敵視するようにナショナリズム（あるいは、ナショナリズムの〈過剰〉）が作用しているとすれば、その方がむしろ問題である。

続いて第三点である。既に述べたように、大きな金融所得を持つ国内富裕層と国内低賃金労働者との間で所得再分配政策が行うことは、単に主権国家システムを前提に政策を考えたことの帰結に過ぎない。国外低賃金労働者よりも（相対的にはよりマシな）国内低賃金労働者を優先する特別な理由が必要になるわけではない。むしろ、萱野の立論によるならば、国内において外国人労働者が劣悪な環境で搾取されていたとしても、それを問題化することはできなくなる。この文脈においても、必要なのはナショナリズムによる同胞優先・国内優先原理ではなく、普遍的な人権原理である。

以上の検討を踏まえると、(4)については次のように言い換えることができるだろう。つまり、ナショナリスティックな国民国家が民主主義原理に基づいて排外主義を抑制しうるのであれば、非ナショナリスティックな国民国家は、主権国家システムの下では、普遍的な人権原理に基づいて排外主義を抑制しうるし、むしろ、よ

りよく抑制しうる。

Ⅳ ナショナリズムと排外主義を媒介するもの

1. 勢いづくナショナリズムの前に

ナショナリズムから排外主義が生み出されることがある。このことは多くの人が指摘しており、問題意識は広く共有されていると言っていだらう。その上で、「ナショナリズムそのものを拒絶する」のか、「ナショナリズムとつきあいながら、排外主義を抑制する」のか、その後の路線の違いで対立がある。

政治哲学者のヤシャ・モンクは、最近の著書の中で、「ナショナリズムを飼い慣らす」と題した章の中で、次のようなことを述べている。「あまりにも悲惨な爪痕を残したナショナリズムの力を、前世紀で終わりにしたいと私が願ったのは、故なしのことではなかった」、「戦争と破壊、民族憎悪と宗教的非寛容から逃れるには、ナショナリズムとは異なるアイデンティティによって人々を団結させること——あるいは皆が所属できる集合的なものが必要だと感じていた」¹⁸⁾。しかし、その後のナショナリズムの復活の世界的潮流を見て、その考えは修正を余儀なくされる。「良しにつけ、悪しきにつけ（こちらの方が可能性は高いが）、ナショナリズムは、一九世紀と二〇世紀でもそうであったように、二一世紀になっても居座り続けるだろう。それは時代の最も強力な政治勢力なのだ。それがどのような意匠をまとうのかによって、情勢も変わるだろう。野心ある政治家は、民族的・宗教的マイノリティを抑圧し、ジンゴイスト（他国への強硬）的感情を煽って、自由な機関を潰し、異なる国の人々を対立させようとするのか、それとも、二一世紀のナショナリズムは民族的・宗教的多様性を受け入れて、活気ある民主主義を維持することができるのだろうか」。このような認識に基づき、「排外主義的ナショナリズム」に対抗するべく「包摂するナショナリズム」という立場を提案する。

つまり、ナショナリズムの害悪を抑制する必要があるが、短期的には、ナショナリズムを別の何かで置き換える可能性は限りなく低い。ゆえに、異なるタイプのナショナリズムを対置せよ、と説くわけである。勢いづくナショナリズムを前にすれば、無理もない話とは思ふ。しかし、この提案には、ナショナリズムが排外主義化していく原因についての洞察が欠けているように思われる。

2. ナショナリズムと反知性主義

ナショナリズムが排外主義に変質していく原因はなんだろうか。難しい議論であるが、私の見解としては、ナショナリズムに含まれる虚偽意識が反知性主義的態度を涵養してしまう点を一番の問題としたい。

先にも述べたように、ナショナリズムには常に、歴史についての虚偽意識が付き纏う。この虚偽意識は、当然のことながら、科学的思考や客観的知識の探究という営み全体への軽視を伴わずにはおかない。ナショナリズムの熱狂が加熱するにつれ、この軽視は侮蔑にさえ至る。ナショナリズムの中には、このような反知性主義的な態度へのきっかけがあらかじめ埋め込まれているのである。

こうした反知性主義的態度は、あらゆる理性的討論の基礎を掘り崩していくだろう。議論を主導するのは、むしろ、場当たりの打算である。どれほど事実と反していようと、短絡的で論理に飛躍があろうとも、非科学的としか言いようのない理路であろうとも、利己的な打算に基づいて発話し行動する。そして、ナショナリズムは、こうした態度を正当化するイデオロギーとして機能するのである。

反知性主義的態度の代表例は、歴史修正主義のそれであろう。本稿ではもはや検討する余裕がないが、ナショナリズムを飼い慣らすためには、単に包摂主義を接続するだけでは足りず、どうしても歴史修正主義の克服が必要になると思われる。

これは困難な取り組みにならざるをえない。

なぜなら、歴史修正主義や反知性主義的な態度はほとんど考える必要がなく選択できる、つまり、コストがほとんどかからない。これに対して、こうした不合理な態度を拒絶するには、丁寧に思考を積み重ねていく忍耐力が必要となる。利己の打算に倫理的意匠を纏わせてくれるお手軽な思想に打ち勝つのは、困難を伴う難事業となるだろう。

V おわりに

本稿では、昨今の日本におけるナショナリズムをめぐる状況を念頭に、ナショナリズムについて批判的な再検討を行った。以下、本稿で述べてきたことをまとめよう。

まず、ゲルナーのナショナリズムの定義を出発点とし、ナショナリズムに含まれるある種の〈過剰〉の存在を指摘した。ナショナリズムには、ゲルナーが重視する産業社会の要請という要因によっては説明できない〈過剰〉が含まれている。そこには自分たちの民族性に関わる事柄について、明白な虚偽さえ述べる傾向性が含まれる。

次に、萱野稔人による一連の「ナショナリズム批判」批判を検討した。萱野の批判は、先に指摘した〈過剰〉が国民概念の切り離すことのできない要素であることを前提しており、この点を踏まえて検討するならば、その多くの主張が支持できないことを示した。ナショナリズムの代わりに、シティズンシップに依拠した〈過剰〉を除いた国家のあり方を構想することは可能であるし、多くの場合に、ナショナリズムよりも普遍の人権原理の方が優れた働きを示した。

最後に、ナショナリズムの〈過剰〉が持つ危険性について述べた。ナショナリズムが持つ反知性主義に親和的な傾向性は、その本質から言って、客観的知識の探究やそのための学問的手続きを軽視する傾向を普及させずにはおかない。その結果、他者との間で理性的討論を行うための土台を基礎から掘り崩してしまう。そのた

Mar. 2020

ナショナリズムを飼い慣らすことは可能か？

め、ナショナリズムに含まれる〈過剰〉が取り除かれない限り、ナショナリズムは反知性主義を蔓延させ、理性的討議のための共通の基盤を掘り崩し、相互理解を不可能にしていく。仮にナショナリズムを飼い慣らすことができるとすれば、反知性主義に対抗する戦略が必要になる。

それでは、今後の研究課題をいくつか整理して、本稿を閉じることにしたい。第一に、〈過剰〉を取り除いたナショナリズムとは区別された国家構想を具体的に考えることが必要である。その際、本文中でも取り上げた岡野八代のシティズンシップ論がおおいに参考になると思われる。第二に、〈過剰〉の主たる要素の一つ、歴史修正主義についての検討はやはり重要である。今回はこの点については、ほとんど検討できなかった。第三に、日本の文脈においては、やはり、天皇制と植民地主義・戦争責任について考えることが重要である。特に、天皇制については、私自身、その取り上げにくさを感じる。タブー視せずに、取り上げていくことが大切である。

注

- 1) 姜昌一「インタビュー 徴用工問題は解決可能だ」『世界』2019年10月号、岩波書店、192ページ。
- 2) アーネスト・ゲルナー、加藤節監訳『民族とナショナリズム』岩波書店、2000年、1ページ。
- 3) 塩川伸明『民族とネーション ナショナリズムという難問』岩波書店、2008年、4ページ。
- 4) ゲルナー前掲書95ページ。
- 5) ゲルナー前掲書94ページ。

- 6) 大澤真幸『近代日本のナショナリズム』講談社、2012年、第1章第3節。
- 7) ゲルナー前掲書99ページ。
- 8) むしろ、〈民族の物語〉や〈神話〉の不合理性は、人々の忠誠心を測るための道具としても機能する。不合理であればあるほど、それを信じ込もうとする行為は忠誠心なくしては不可能ということになるから。
- 9) ベネディクト・アンダーソンが、ナショナリズムの三つのパラドクスという議論を展開しているが、その第一と第二のパラドクスは本稿で述べているところの〈過剰〉に纏わる問題と重なる。ベネディクト・アンダーソン、白石隆・白石さや訳『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2015年、22ページ。
- 10) 萱野稔人『ナショナリズムは悪なのか』NHK出版、2011年。同『成長なき時代のナショナリズム』角川書店、2015年。
- 11) 萱野(2015)前掲書、第五章。
- 12) 萱野(2011)前掲書、92ページ。
- 13) 新川明『沖縄・統合と反逆』筑摩書房、2000年。
- 14) 姜尚中『愛国の作法』朝日新聞社、2006年。
- 15) 岡野八代『シティズンシップの政治学 国民・国家主義批判 増補版』白澤社、2009年、27ページ。
- 16) 古田元夫『アジアのナショナリズム』山川出版社、1996年、81～83ページ。古田は孫文、ガンディー、ホー・チ・ミンらの民族運動について検討した上で、アジアの抵抗者側のナショナリズムも多数派の自己中心主義の影響を排除できなかったこと、「国民」の名の下に行われる行為に対しては歯止めがなかったことを指摘している。
- 17) 萱野(2011)前掲書、第一章。
- 18) ヤシヤ・モンク、吉田徹訳『民主主義を救え！』岩波書店、2019年、202ページ。

(2019年11月22日掲載決定)